

北杜夫著「どくとるマンボウ回想記」日本経済新聞社 2007年1月24日刊を読む

わが人生

1. 私は何年か前、肺炎で入院して以来、めっきり体力が弱くなった。
2. それに加えて腰痛がひどくなり、歩くにしても杖がないと危なくなった。また入歯の具合がわるく、ものを噛むのもしんどくなった。
3. もちろん、私なりに健康にも気を使った。私はかなりの飲ん兵衛で、若い頃は二日でウイスキー一本を空けたものである。アルコール性肝炎ともなり、節酒に苦労もした。しかし、ごく自然に強い酒を求めなくなった。ビールだけで済んだ。それもかなり前から、一日に缶ビール二本で済むようになった。それ以上、体が要求しないのである。
4. 煙草にしてもヘビー・スモーカーで、一日に三箱も吸ったほどである。若い頃、煙草をやめたこともあったがそれにはかなりつらい思いもした。ところが、煙草もごく自然にやめることができた。自分でも不思議なくらいである。
5. 私は昔から賀状を出すのがオックウであった。それで頂く賀状を見て、返信を要する人にだけ賀状を出していた。活字の賀状は味気ないので、自筆のハガキをコピーしたものである。或る時期から、高校や大学時代に作った短歌や詩の一節を書いた。たとえば、

いつしかに季節の移りて見渡せば四方のはかなさ

6. すると一人の方から返信があって、まさしくその通りだと書いてあった。つまり、いつの間にか友人知人がほとんど亡くなってしまったというのである。
7. その頃、どう考えても自分はもう一、二年しか生きられぬと考えた。
それで今から五年前、要約するとざっと次のような賀状を書いた。
「小生、失礼ながら賀状は本年かぎりにはさせていただきます。あとは腰痛にも耐え、なるだけ早い自然死を待つつもりです。これまでの御芳情に感謝致します。

世を捨てた北杜夫」

8. とところが、世を捨てるとかえってストレスもないらしく、未だに死なない。これには私としても困っているところである。
9. それには妻の努力もあるようだ。常日頃ガミガミと私を叱りつける妻が、それなら夫をほってお

いてくれるかという、不思議にもやはり私が死ぬと困るらしい。それで、歯の弱い私のために、何とか食べられる食事を作ってくれる。それも栄養のバランスが良く、従って私はなかなか死なない。娘も会社勤めで忙しく、私の世話はしないが、これまた父親のことを思ってくれている。

10. 私がうれしく思うのは、かなりの国や土地を旅行できたことである。これも作家という職業だったからであろう。宇宙飛行士が地球を離れて改めて地球のことを考えるように、人は国を離れてみて、自分の母国というものを考えるのである。

11. わが人生をふり返ってみて、さして満足もしないが、それほど後悔するわけでもない。なにより私が幸せだと思うのは、高校に入る頃から父をずっと尊敬し、これまた変り者であった母をもまた好きであったことである。

12. また好きな文学の道を歩いてきて、何とか暮せたのもやはり幸せと言ってよかろう。さしてこれと言った仕事もできなかったが、それ以上をべつに望むことは全くない。

[コメント]

北杜夫氏の本としては「どくとるマンボウ航海記」「どくとるマンボウ青春期」「どくとるマンボウ昆虫記」など、何回もよく読んだ。久々読んだこの本もあいかわらず「どくとるマンボウ」であってさわやかさを感じたこと、以前と同様であった。

- 2009年9月4日林明夫記 -